

広野文芸欄

季題 当季自由句

広野町神無月句会

根本 山水

朝顔や笑もえいて今日はじまり
栗きの子とゞけて秋刀魚おくられる
山道を登りきつたり秋の雲

鯨岡 一生

笠ふかく化粧してゐる案山子かな
たえまなき虫の音聴いて二人酒
翡翠の枝にうかがふ水面かな

遠藤健太郎

名月の今渡り切る浅見川
ひもすがら舞いつ沈みつ稲雀
いつもより任事捗る鴟目和

新米の食味五感でおいしいね
町内のいづこの家の金木犀
早起きは三文の得栗拾う
塩 史子

酒井 津祢

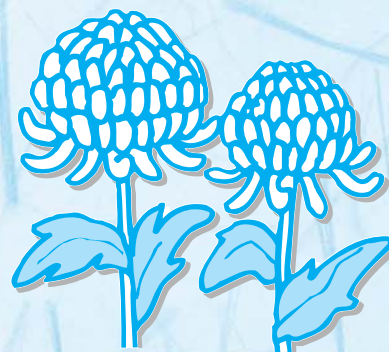
北上川熟る、稲田の真中を
吹く風の秋海棠の紅流す
ひと本の大樹に安らぐ晩夏かな

山田 基星

畦行きて案山子に手をふる幼子等
枝豆を孫と分けあう夕餉かな
キチキチの子の手に追われはね返る

西山 子

地より出て地へとしだるる萩の花
誕生日色濃き薔薇でありにけり
連山の影のうき立つ星月夜



鯨岡 正子

雨の冷はじきてりんと茄子の花
百合の花八十路の坂を登りけり
盆踊り手ぶりに孫と知られけり

阿部 真生

空青く澄みて炎暑の予感あり
愛犬の元気をうばう酷暑かな
リズムよき梅雨の雨垂れひゞきけり

宮下 純子

秋涼し竿竹売りの声ゆるく
信濃路の茶店ひそやか走りそば
山峡の道いろどりて乱れ萩

広野みなづき短歌会十月詠草

(旧仮名使用 五十音順)

蝉の声きくはなつかしとく母の声夢にた
ちたり涙流るる
ばあばあと孫の投げキッス受くるとき
ぢーも思はず真似てほほ笑む
猪狩ユリ子

猪狩ユリ子

飛ぶ鳥は何を目当てに空をゆく我が行く
先を見通す如く
秋空に浮く白雲の美しさ仰げる吾の心す
みつつ
小澤 健次

小澤 健次

南海に猛烈台風生れしといふ 災害なき
をひたすら祈る
咲き初めし白萩しとど雨に打たれ枝こと
ごとく地を這ふごとし
つつましく生きてゆかむと今更に電灯テ
レビこまめに消しぬ
木村ミヨ子

木村ミヨ子

般若心経心しずかに唱ふれば吾が雑念の
澄みゆくここに
古稀までは病まず生きたしと思ひつつ我
が身一つの行く未知らず
母も妻も浄土の客となりたれば心しずめ
て花を手向けね
菅原 泰郎

菅原 泰郎

おだやかな秋の日和に誘はれて母は見に
行く「わくわくいわき」
秋晴れの日ざしをうけて紅葉せる木々の
増えたる山のすがしさ
田副 耕一

田副 耕一

帰りきし孫は耳許に声ひそめ「男は泣か
ない」と涙ぬぐひぬ
天空に向ひ峙つ松の木は境を守る証とな
りて
新田 里子

新田 里子

奥飛驒慕情を練習せねばと楽しげに亡母
の歌えるテープ出できぬ
片づけを忘れて一刻亡き母と奥飛驒慕情
に和みをりしか
思はざる亡母のテープに思ひ出のよみ返
りつつ秋日夕づく
山内 洋子

山内 洋子

凡そに思ひるし寿命米寿越え鏡の前に我
はうろたふ
歌詠まむとしつつ眠りにおちてゆく眠り
は時を分かず来りて
老齢をいたわる文に朝々を新鮮果実味は
いて食む
呼びかけて抱へ来し野花分けくれし一会
の言葉すがしかりしか
鴨の飛来待ちて歩めば行きづりの人親し
げに声かけくるる
日の落ちて近き駐車場も静まりぬ明日も
よき日か宵月匂ふ
良き言葉心にしみて口誦さむ「水に音あ
り木に言葉あり」と
満月の昇らむとする森の上東電の高塔く
ろぐると建つ
山口 歌子

山口 歌子